（様式１）

令和４年度　学力向上のための重点プラン【小学校】

新宿区立東戸山小学校

■　学校の共通目標

授業作り	重点	児童の疑問や発見から生まれる「問い」を大切にして、既習内容を活用し、自分なりの答えにたどり着く主体的・対話的な学習過程を大切にしていく。また、児童一人一人の実態や課題に即して、多様な学習形態を計画的に取り入れる。	中間評価		最終評価	
環境作り		ＩＣＴ機器の活用の仕方を検討したり、誰にも分かりやすく落ち着いて学習に取り組めるユニバーサルデザイン化を推進したりし、児童が主体的に学習に参加できる環境作りを行う。				

■　学年の取組内容

学年	教科	学習状況の分析（10 月）	課　題（10 月）	改善のための取組（10 月）	最終評価（２月）
1	国語				
	算数				

学年	教科	学習状況の分析（４月）	課　題（４月）	改善のための取組（４月）	中間評価・追加する取組（10 月）	最終評価（２月）
2	国語	学 毎日の漢字学習の際に確認テストを行ったり、授業や家庭学習においてデジタルドリルに取り組んだりすることで、ワークテストにおいて86%の児童が8割程度正確に文字を書くことができた。より正しい字形で丁寧に文字を書くことについては、今後も指導を継続する。 学 朝の会でのスピーチや週末の日記に取り組むことで、相手に伝わるように話したり、文章を書いたりすることへの意識が高まった。より分かりやすく、正確に話したり、文章を書いたりできるように継続して取り組む。	・集中して学習に取り組むことに課題があり、学習規律を定着させる必要がある。 ・字形を整えてなぞったり書いたりすることができるようになる必要がある。 ・自分の考えを発表する力を身に付ける必要がある。	・担任による絵本の読み聞かせの機会を増やし、話を最後まで聞いたり、注視したりする力を身に付ける。 ・漢字ドリルに丁寧に取り組めるような時間を確保し、家庭学習や朝学習で定着を図る。 ・日直による朝の会のスピーチや、質疑応答を通して、人前で話すことの抵抗を減らし、友達との対話を日常的に学習活動に取り入れる。		
	算数	学 ほぼ全児童が正確に計算をできるようになった。一方で正確に計算をするのに、長い時間を要する児童がいる。計算練習の機会を増やすとともに、デジタルドリルを活用して、正確に、「より速く」計算ができるようにする。 学 概ね全ての児童が、自分の考えをノートに記すことができるようになってきた。苦手な児童には、ヒントを示したり、一緒に考えを表したりする支援を通して、児童が自分の力で考えを書くことができるよう指導を重ねていく。 学 デジタルドリルを活用することで、児童が主体的に予習・復習に取り組むことができた。	・集中して学習に取り組むことに課題があり、学習規律を定着させる必要がある。 ・位を揃えて筆算を書き、正しく計算し問題解決する力を身に付ける必要がある。 ・計算の仕方を説明する力が付くよう、計算過程を図や言葉で表す活動を取り入れ、指導する必要がある。	・短い学習活動を設定したり、課題を終えた児童はデジタルドリルに取り組んだりし、飽きずに集中して取り組める時間を延ばす。 ・位を間違えて書いてしまう児童には、方眼のあるノートに問題を書くよう個別に指導し、「10 のまとまり」や「ばら」を図式化して理解できるようにする。 ・ペアや小グループで計算の仕方を説明する活動を設け、少しずつ言語化できるようにしていく。		

3	国語	調漢字を読むことについては、8割の児童ができている。 調話し手が知らせたいことを落とさないように聞くことは、7割の児童ができているが、話題に沿って質問を考えることに課題がある。 調文章を読み取ることに課題がある。 学表記の間違いが全体的に減ってはきたが、まだ間違えてしまう時があるので、指導を継続していく。 学書くことに抵抗を感じる児童は減少した。	・人の話をじっくり聴く力を身に付ける必要がある。 ・文字を丁寧に書いたり、句読点を正しく使ったりする力を身に付ける必要がある。 ・物語の叙述から登場人物の気持ちを想像する力を身に付ける必要がある。 ・文章を読み取り、はっきりと音読する力を身に付ける必要がある。	・友達や先生の話を黙って最後まで聴くことを大切な学習規律と位置づけため、「耳で、目で、心で聴く」ことを掲示したり、友達が発表したことを他の友達に発表させたりして、聴くことが日頃から自然にできるようにする。 ・文字が丁寧に書けるようにするため、毎日の漢字練習の際に細かく指導したり、タブレット端末を活用した漢字練習で正しい文字の形を練習させたり、文章を書かせる前には、事前に句読点の使い方を全体に指導したりして、書けるようにする。 ・物語の登場人物の気持ちを考えるため、登場人物の言動を一部取り上げ、クラス全体で想像した気持ちを共有した後、個別の活動に移るようにする。 ・文章を読み取り、はっきりと音読させるため、毎日音読の宿題を出し、保護者に確認をしてもらったり、音読の発表会を定期的に行なったりする。		
	算数	調文章を読み取ることが苦手なため、文章問題を解くことに課題がある。 調繰り下がりのあるひき算について課題がある。 調簡単なかけ算については、9割の児童が解くことができている。 学毎時間の始めに、百マス計算を行うことで、計算のスピードや正確性が向上した。 学自分の考えを表現することは、できるようになってきた。	・九九を十分に覚えられていないため、繰り返し指導する必要がある。 ・既習事項を生かして問題を解くことが難しいため、指導が必要である。 ・文章問題を理解し、自ら問題解決を進める力を身に付ける必要がある。 ・自分の考えを積極的に表現するよう、指導する必要がある。	・かけ算の定着を図るため、復習を放課後に行なったり、宿題として出したり、タブレット端末のデジタルドリルを取り組ませたりして、進捗を確認して定着を図っていく。 ・既習事項を生かして問題を解けるようにするため、授業の始めに既習事項を簡単に復習したり、ホワイトボードに書いたりして、考え方の起点となるように示していく。 ・文章問題を自力で解決できるようにするため、文章問題が教科書で出てきた場合に注目すべき数字や問題の見方などを細かく指導したり、似たような文章問題をプリントなどで用意して、学習したことをすぐに生かして解決させたりしながら、文章読解力を高め、解決できるようにする。 ・自信をもって発表できるようにするため、机間指導の際に赤丸をつけたり、発表を促したり、よい発表を讃えたりしながら、発表の良さを感じ取ってもらうようにする。		
4	国語	調全ての項目で目標値を下回った。特に「メモをもとに文章を書く」は 28.3%、「文章を書く」は 18.3%と極めて正答率が低い。最も正答率が高い「漢字を読む」でも正答率は 78.9%で、目標値を 4%ほど下回った。観点別正答率では「主体的に取り組む態度」が 32%と低く、学習に取り組む意欲や態度も向上させていく必要がある。 学新出漢字の練習は授業時間内に確保し、誤答は正しく直させた。漢字を正しく書こうという意欲をもてる児童が少しずつ増えてきた。自分の考えや気持ちを文にするときは、友達の書いた文を参考にさせることで、自力で文を書こうという意欲をもてる児童が少しずつ増えてきた。	・意欲的に取り組む児童とそうでない児童の差が大きい。また、挙手をして発言するということが定着していない児童も多く、自分の考えていることや全体に問うていることを自分勝手に発言してしまう児童が見られる。 ・国語に限らず、自分の考えを文章にすることが苦手な児童が多い。中には、具体的な文例があっても何も書けない児童もいる。 ・自力解決へつなげるための手だてに時間を要する。穴埋め式にヒントの文を提示しても、答えを埋めずにそのまま書き写すこともある。 ・音読は全体的によくできる。 ・漢字の習得が全体的に低い。3年生の復習テストも問題を先に渡していても半数が半分程度の正答率である。	・話を聞くことを落ち着いて聞くことの定着を目指す。学習の規律を確認することから、話を聞くことの習慣付けを通して活動内容や課題に対しての理解へつなげる。 ・ノートを自分で書くことを増やし、自分の考えを文でまとめることを通し、考えをまとめる力をつける。他の教科においても自分の考えを書く機会を設ける。 ・１問１頭など問いを細分化し、本題の問いへつなげられるように工夫する。 ・辞書を使った意味調べを取り入れ、文章の理解へつなげる ・漢字学習は、タブレット端末のデジタルドリルやミニテスト、練習を多く取り入れることで既習の漢字の定着を目指す。（３年時の内容も含めて）		
	算数	調全ての項目で目標値を下回った。特に「10000 より大きい数」「かけ算」「わり算」「円と球」は目標値を 10%以上下回るなど課題が大きい。観点別正答率では「思考・判断・表現」が 34.2%と低く、学習したことを活用する力に課題のある児童が多いことが分かる。 学学習によって習得した知識や技能が時間の経過とともに大きく減少する児童が目立つ。既習事項について、年間を通して反復練習をする必要性がある。また、かけ算九九や、繰り上がりや繰り下がりのあるたし算、ひき算が十分に定着していない児童が複数名おり、個別指導が必要である。	・全体での解答を積極的に取り組む児童が多いが、あまり考えずに質問したり友達に答えを聞いたりする。 ・桁数が増えると数の処理が追い付かず、位を間違えた計算、計算を忘れる数字が出て、誤答へつながる。 ・かけ算、繰り上がり繰り下がりの計算が定着していない児童も複数名見られる。 ・ノートの書き方も、毎回確認しないと、別の問題の数字同士がつながり、誤答へつながっている。 ・数字の書き方特に0ができていない。	・少人数の算数を生かし、１時間の中で多く発言ができるように問いの細分化をおこなう。 ・少量の問題数にプリントを数多く練習問題を増やすことで、自力で解いていくことに慣れる。 ・友達同士で考えを交流する時間を明確にすることで、見通しをもった学習の展開を促す。 ・ノート指導を丁寧に行い、誤答につながることがないようにする。 ・タブレット端末にあるデジタルドリルを活用して、多様な問題を楽しく解こうとする学習意欲を高めていく。		

5	国語	調「漢字を読む」は 1.5%、「漢字を書く」は 6.7%、「物語の内容を読み取る」は 2.2%、目標値より高かった。しかし、「話し合いの内容を聞き取る」は 6.9%、「言葉の学習」は 5.7%、「説明文の内容を読み取る」は 10.5%、「メモを取りながら話し合う」は 5.6%、文章を書くは 16.7%低かった。観点別正答率では、「主体的に学習に取り組む態度」が 12.7%と低かった。用意されている学習内容を真面目に取り組むことは、良くできているが、発展的に取り組んだり学習したことを活用していく活動を増やしていったりする必要がある。 学漢字練習は繰り返し取り組んだことで、児童も自信をもつことができた。また、物語文では、主人公の気持ちの変化に着目して丁寧に読み取ることで、学習が楽しいと感じ、さらに進んで取り組むことができた。説明文の理解や、聞き取りの力については論理的に解釈する力のため、ノートのまとめ方を工夫したり、相手の伝えたい要旨を捉えながら聞く練習を繰り返したりする必要がある。	・正答率の低かった項目について分析・考察をすると、国語の学習に限らず、話を聞くことを苦手にしている児童の割合が非常に多いと言える。音声情報のみで内容を理解しなければならない場面において、話の内容や筋を、言葉を手掛かりにして、想像したり考えたりすることができない点が具体的な課題として挙げられる。これは、話し言葉に対してだけでなく、文章の読み取りにおいても同様の傾向がみられる。 ・授業における学習規律、及び、家庭における学習習慣がまだ確立、定着していない。 ・授業中の発言、自力解決等、意欲的に取り組む児童が多いが、個人差がある。 ・文章構成や語句の使い方を手がかりに、筆者の主張、主題や要旨を読み取る力がやや不足している。 ・問われていることを的確に捉え、自らが伝えたいことを効果的に表現するための文法（主語、述語、接続詞等）が十分に身に付いていない。 ・漢字の習得に個人差がある。	・発問、指示を工夫し、児童同士の充実した学び合いを促せるようにする。 ・話型を活用し、考え・意見を発表し、交流する場を設けることで、児童自らの考えや意見を相手に伝えられるようにする。 ・作文の書き方の基礎・基本の指導を徹底する。 ・説明文の指導において以下のことを重点的に行う ・文章構成を捉える。　・事実と意見を弁別する。 ・主張や主題を捉える。　・文法を理解する。 ・要約文を書く。 ・話し合いや意見を交換する活動を取り入れ、考えを発表する場を作る。 ・音読を繰り返し、聞き手を意識した声の出し方を練習させる。 ・朝学習やタブレット端末を活用した家庭学習を通して、漢字の定着を図る。 ・毎日、書く活動を取り入れ、自分の考えを表現できるようにする。		
	算数	調教科の正答率は、2.2%低かった。内容別正答率では、目標値より「わり算」は、3.1%、「小数」は 3.6%、「角の大きさ」は 4.1%高かった。一方、「億と兆、概数の表し方」は、8.9%、「計算のきまり」は、3.3%、「垂直・平行と四角形」は 7.1%、「折れ線グラフ」は、9.4%低かった。計算問題のように、繰り返し練習できる内容は定着していたが、問題場面を理解し、状況を整理した上で根拠をもって立式するといった設問の正答率は低くなっていた。丁寧に段階的に手順を踏みながら考える力を身に付けさせる必要がある。 学学習内容が定着していない児童には、放課後学習や休み時間を使って個別に対応し、問題に取り組む方法を指導した結果、意欲を引き出すことができた。また、家庭学習などで既習事項を繰り返し復習することも有効であった。線分図や数直線図等、問題場面分かりやすく表す学習方法を、定着させることができるよう指導を進める。	・正答率の低かった項目について分析・考察をすると、論理的な思考や処理が求められる問題に対して、自力解決することができない児童の割合が多いと言える。これは、国語科における課題と根本的な部分で共通するところがある。事象同士を関連させて問題解決を図ることができない点が具体的な課題として挙げられる。 ・授業における学習規律、及び、家庭における学習習慣が確立、定着していない。 ・個別指導を要する児童の割合が多い。 ・基本的な知識、技能の定着においては、個人差がかなり見られる。 ・問題場面を捉えたり、既習事項を活用して問題を解決したりする力がやや不足している。 ・自分の考えを式や図、言葉を使い説明できる児童が少ない。 ・四則計算が正しくできず、分数や小数の計算でつまずきが見られる。 ・既習事項が十分に定着していないため、完答に結び付くまでに至っていない。	・互いに考えを伝え合い、話し合うことにより、自らの考えや集団の考えを高め、発展させられるような授業展開ができるよう工夫する。 ・課題提示を工夫することによって、児童に解決の見通しをもたせ、自ら学んでいけるようにする。 ・算数的活動を工夫することによって、課題の発見と解決に向けて、主体的・協働的に学んでいけるような学習活動を推進する。 ・学習の振り返りの活動を授業の中に位置付け、成果の確認や次の学習への見通しをもてるように習慣付ける。学習内容の定着を図るため、タブレット端末を活用したデジタルドリルやプリント等で繰り返し練習を行う。 ・問題解決型の学習を計画的に取り入れる。 ・問題を数直線や図等に表し、解決させる指導を繰り返し行う。 ・習熟度別の学習ではレディネステストを使ってクラス分けを行い、個に応じた指導をする。 ・朝学習や放課後学習、補習の時間等を使って、基礎・基本の定着を図る。 ・ノート指導を通して、理解が深まるまとめ方を指導する。		
6	国語	調問題の内容別正答率について、前年度からの経年変化をみると、「説明文の内容を読み取る」が大幅に上昇し、目標値よりも 2.1%高い結果となった。また、「漢字を読む」は目標値より 0.7%高い。領域別正答率については「書くこと」が 10.5%、「読むこと」が 16.7%、前年度よりも上昇した。読書の機会を意図的に設定し、習慣を身に付けさせる指導をしてきた成果である。一方、「話し合いの内ようを聞き取る」では、前年度よりも 9.5%低かった。話し合いの要点を捉えて聞く力を伸ばす必要がある。 学物語文においては、登場人物が「見たこと・聞いたこと・したこと・言ったこと・思ったこと」に注目することで、場面の様子や心情の変化を叙述に即して読む力が身に付いてきた。説明文においては、「問いと答え」の関係や「はじめ・中・終わり」の文章構成を適切に指導し、段落ごとの内容の読み取りを丁寧に行ったことで要旨を捉えられる児童が増えた。書くことにおいては、主語述語ははっきりしているものの、内容が抽象的で分かりづらい文章を書く児童がいるため、5W1H を意識した書き方を指導していく。	・正しく漢字を書いたり、既習の漢字を適切に使って文章を書いたりできるよう指導する必要がある。 ・順序立てて話したり、要点をおさえて聞いたりすることができるよう指導する必要がある。 ・語彙の習得数を多くして、活用できるようにする。 ・文章構造について理解し、適切に文章に書き、表現できるよう、5W1H を意識した書き方を指導していく必要がある。 ・論理的な思考を、文章で表現できるようにする。	・読書の機会を設け、習慣を身に付けさせ、文章に慣れさせる。 ・朝学習や放課後学習、家庭学習を通して漢字の定着を図る。 ・朝や帰りの会、各学習活動において、話型の指導や、話の聴き方を指導し、話すこと・聞くことの力を高める。 ・新出漢字の書き順をタブレット端末のアニメーション機能を活用して確認したり、デジタルドリルを活用して確かめさせたりする。それらの動きに合わせて空書きすることで正しい筆順の定着を図る。 ・分からない言葉が出てきた時には、教師がすぐに教えるのではなく、国語辞典を活用して言葉の意味を調べさせ、語彙力を高めていく。 ・自分の考えを書いたり、振り返りを書いたりすることで文章を書く機会を増やし、文章を書く力を高める。その際に、例文を示し、書くことを苦手とする児童への手立てとする。		

	算数	調領域別正答率について、前年度からの経年変化をみると、「データの活用」が 15.4%上昇した。また、「図形」は 13.2%上昇した。習熟度別指導を充実させ、基礎・基本の定着を図ってきたことが効果に表れた。一方で、教科の正答率については、「活用」が8.1%下降した。小問別解答と正誤状況より、文章問題における無回答率が高いことと、前半に設定されている計算問題等に時間を費やし、後半に設定されている問題に辿り着けていない児童がいることが要因として挙げられる。基礎・基本の定着を引き続き行っていくことと、数的処理を向上させるための反復練習や生活場面を取り入れた実践的な指導を行っていく。 学習熟度に応じた学習を繰り返し行うことで、基礎・基本を定着することができた。また、毎回の学習において指導者用デジタル教科書等を活用し、図形の操作を見せるなど問題場面を視覚化する支援を行うことで、より問題場面を具体的に捉えさせることができた。さらに、朝や放課後の学習において既習事項の定着を図るための取組を行ったことで基礎・基本が身に付いた。一方、ワークテストなどにおいて、文章問題では、場面が捉えられなくなる児童がいるため、題意を理解する力を付けていく必要がある。	・学習内容の定着度の個人差が大きいため、底上げを図る必要がある。 ・題意を正確に読み取る力を身に付けさせる必要がある。 ・時間、長さ、かさ、重さ等の量感をイメージして考える力を身に付けさせる必要がある。 ・課題解決の方法を考え、文章や図で表現できるようにする。	・学習内容の定着度の個人差が大きいため、習熟度別の学習では、レディネステストを使用してクラス分けを行い、個に応じた問題数で繰り返し練習をすることで、基礎・基本の定着を図る。また、児童の実態に応じて、発展的な学習も取り入れていく。 ・単元のまとめの際にはプレテストを行い、学習の定着度を確かめる。 ・単元にとらわれない、継続的な繰り返し学習を適宜取り入れる。 ・朝学習や宿題において積極的にデジタルドリルを活用し、学習内容の習熟を図る。 ・問題の中に生活場面を取り入れることで、問題場面を具体的に捉えさせ、学習したことを応用する力を身に付けさせる。 ・長さや重さ等、具体的な物を操作する算数的活動を多く取り入れ、具体的なイメージをもって考える力を高める。 ・問題を数直線や図等に表し、解決させる指導を繰り返し行う。		
音楽	・前年度校内アンケートの結果、全校平均 85 パーセントの児童が、音楽科の学習に対して肯定的に評価していた。 ・伸び伸びと表現したり、楽曲に対する自己のイメージを膨らませたりして鑑賞している。 ・学習に対して消極的、苦手意識をもっている児童が一定数いる。	・授業中に集中が途切れ、自席での学習が難しくなる場面がある。 ・学習の積み重ねが難しく、技能や階名などの知識の定着に差がある。 ・語彙が乏しく、感じたことや気が付いたことを記述したり、述べたりする。 ・楽曲の特徴などを生かして音楽表現を工夫したり、思いをもって表現したりすること。	・歌唱中、鑑賞中の私語、離席には適切な指導をするとともに、発問や導入を工夫し、楽曲に興味をもたせる。 ・歌唱時にリズム唱を取り入れ、音符に親しむ機会を増やす。 ・個に応じたワークシートを作成し、スモールステップで学習を進める。 ・音楽を表す形容詞を掲示し、選択させることで児童の語彙を増やす。 ・教師が表現の仕方を具体的に示し、児童に模倣させることで、児童の表現力、思考力を高めていく。		
図工	・図工の時間を楽しみにしている。 ・学習に対する意欲は高い児童が多い。前年度校内アンケートの結果、全校平均 94 パーセントの児童が、図画工作科の学習に対して肯定的に評価していた。	・「人の形を絵に表す」活動への苦手意識が強い児童が多い。 ・本時に経験し、次の学習に生かしたい知識・技能の定着度合いに差が大きい。 ・図工や他教科での既習事項と、現在の学習活動を関連付けてとらえる必要がある。	・関連する題材(粘土で立体につくった人の形を絵に表す、あるいはその逆など)を意図的に配置して、人の形を絵に表す活動への抵抗感を減らす。 ・学習の様子や作品の記録画像を使い、記憶に働きかける。 ・全体や個別の指導の際に、既習事項や身近な事象との関連について、気付くよう指導する。		
特支	・学習活動に対して、意欲的に取り組む児童が多い。真面目に一生懸命取り組もうとするが、自主的に考えたり工夫したりすることに苦手さが見られる。 ・児童数の増加やコロナ禍により、学級全体で集まる機会が減ったり関わりをもる活動が減ったりしているため、学年やグループを越えた友達同士でうまくコミュニケーションが取れないことがある。	・学習の基礎・基本の定着に個人差がある。さらに、生活場面の中で、学んだことを応用することが苦手な児童がいる。 ・自分の思いや考えをうまく相手に伝えたり、聞いたりすることが難しく、コミュニケーションに支援が必要な児童がいる。	・国語や算数などで学んだことを、生活場面を想定した学習活動に生かし、実践的に学ぶ機会を増やす。 ・タブレット端末やＩＣＴ機器の活用、学級内たてわり班活動、異学年交流など、意図的に関わる機会を作り、児童同士がすすんでコミュニケーションをとれるようにする。		

調…新宿区学力定着度調査の結果から見える学習状況　　学…授業での様子や提出物、作品、ワークテスト、デジタルドリル等から見える学習の状況　　※分量は 2 ページ以上となってもよい。